編集後記

今年の紀要論文は実に多彩な顔ぶれになっていて，編集に携わった一人として大変うれしく思っている。ここで多彩というのは，必ずしも論文のテーマについてではない。それぞれの執筆者の投稿意図の多様性という意味である。

ある執筆者は，すでに本大学院を修了したのち論文を地道に書き溜めて大学教員となった後も，自身の研究成果を発信する価値を信じて投稿している。またある執筆者は，自分のライフワークを発見して，その道を主体的に切り開くために継続的に投稿をしている。在学生でありながら，前年度の自らの実践を振り返り，今年度教職大学院で学んだ新しい理論や研究方法を加味して優れた論文にまとめ採択された現職教員学生がいる。

昨年度精一杯の努力をして自身の実践を振り返り整理して執筆した論文が無念にも掲載不可となったが，今年度エビデンスを増やし論理性を高めて書き直して見事採択された人もいる。その逆に，厳しいレフリーの審査によって掲載不可となり，今年度の紀要に自分の論文が収められなくて悔しい思いをした人もいる。

それぞれの執筆者には，それぞれの思いがあり，その思いを遂げた人と，捲土重来の思いを胸に秘めている人がいるのである。

どのような思いや経緯があろうとも，私たち早稲田大学教職大学院に集った学生たちは，論文執筆という大変な努力と粘り強さを求められる取組に熱意を持って臨んだことは事実であり，それは我が教職大学院の強さと先進性を表しているといえるのである。

その意味で，本紀要の論文執筆は，あくまでも学校教育の充実と改革を願って行われているのであり，その伝統はすでに 16 年の長きに渡るまでになってきた。

これからも，その伝統を受け継ぎ，より多くの修了生と在学生たちが，自ら担当する子どもたちのために，優れた実践を通してその成果と課題を本紀要で発信してくれることを願っている。私たち教員もそれに負けることなく，学校教育の刷新に資する研究成果を発表していく所存である。

（紀要刊行委員長　田中博之）